

Kokoro – Sensei and I – Parts 1-9 (Natsume Sōseki)

じょう せんせい わたくし
上 先生と私

いち
一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいかわからなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼は固より帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探す面倒ももたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものにはながなわてひとこてとどくるまいにじゅっせんとい長い暇を一つ越さなければ手が届かなかった。車で走っても二十銭は取られた。けれども

しお あ で き どう うで もも だ おんな ことさらに く かく
塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがち
であった。大抵は頭たいていに護謨製ゴムせいの頭巾ずきんを被かぶって、海老茶えびちゃや紺こんや藍あいの色なみまを波間うに浮かうかしていた。
そういう有様ありさまを目撃もくげきしたばかりの私の眼めには、猿股す一つで済すまして皆みんななの前に立たっているこ
の西洋人めづらがいかにも珍めづらしく見えた。

彼はやがて自分じぶんの傍かえりを顧かえりみて、そこにござんでいる日本人にほんじんに、一言二言何かひとことふたことなにいった。その日
本人は砂の上おに落ちた手拭てぬぐいを拾ひろい上げているところであったが、それを取り上げるや否や、す
ぐ頭つつを包あんで、海の方あるへ歩だき出した。その人ひとがすなわち先生先生であった。

わたくし たん こうきしん なら はまべ お い ふたり うしろすがた みまも
私は単たんに好奇心こうきしんのために、並ならんで浜辺はまべを下おりて行く二人い ふたりの後うしろ姿すがたを見守みまもっていた。すると
かれ まっすぐ なみ なか あし ふ こ とおあさ いそちか さわ
彼らは真直まっすぐに波なみの中に足あしを踏ふみ込んだ。そうして遠浅とあさの磯いそちか近くさわにわいわい騒さわいでいる
たにんず あいだ とお ぬ ひかくてきひろびろ ところ く およ だ
多人数たにんずの間あいだを通とおり抜ぬけて、比較ひかくてき的ひろびろの広ところ々くした所ところへ来くると、二人およとも泳だぎ出した。彼らの頭あたま
が小さく見えるまで沖ちいの方みへ向おきいて行ほうった。それから引むき返いしてまた一ひ直線かえに浜辺いっちょくせんまで戻もど
って来きた。掛茶屋かけぢやへ帰かえると、井戸いどの水みづも浴あびず、すぐ身体からだを拭ふいて着物きものを着きて、さっさとど
こへか行いってしまった。

彼らの出でて行いった後あと、私はやはり元もとの床几しょうぎに腰こしをおろして烟草タバコを吹ふかしていた。その時とき私は
ぼかんとしながせんせいら先生ことの事かんがを考かんがえた。どうもどこかで見みた事ことのある顔かおのようおもに思おもわれてなら
なかつた。しかしどうしてもいつどこで会あった人ひとか想おもい出だせだずにしまた。

その時の私くったくは屈托くつたくがないというよりむしろ無聊ぶりように苦くるしんでいた。それで翌日あくるひもまた先生先生に会
った時刻じこくを見計みはからって、わざわざ掛茶屋かけぢやまで出でかけてみた。すると西洋人せいようじんは来こないで先生先生一人ひとり
むぎわらぼう かぶ めがね だい うえ お てぬぐい あたま つつ
麦藁帽むぎわらぼうを被かぶってやめがねって来だいた。先生先生は眼鏡めがねをとって台だいの上うえに置おいて、すぐ手拭てぬぐいで頭あたまを包つつ
んで、すたすた浜はまを下おりて行いった。先生先生が昨日きのうのようよくに騒さわがしい浴客よくかくの中なかを通とおり抜ぬけて、一人で
泳きゆうぎ出した時とき、私私は急急にその後おが追かい掛あけたくなった。私は浅あい水みづを頭あたまの上うへまで跳はねかして
そうとう ふか めじるし ぬきで き
相当そうとうの深ふかさの所ところまで来来て、そこから先生先生を目標めじるしに抜手ぬきでを切きった。すると先生先生は昨日きのうと違ちが
て、一いっしゆ種こせんの弧線えがを描みよういて、妙みような方向ほうこうから岸きしの方かえへ帰はじり始はじめた。それで私私の目的もくてきはついたつに達
せられなかつた。私私が陸おかへ上あがって雫しずくの垂たれる手てを振ふりながら掛茶屋かけぢやに入はいると、先生先生はもう
ちゃんと着物いを着ちがて入そとれ違ちがいに外そとへ出でて行いった。

わたくし つぎ ひ おな じこく はま い せんせい かお た こと く かえ
 私 は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返
 した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。そ
 の上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰っ
 て行った。周囲がいくら賑やかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。
 さいしょ せいようじん ご すがた み ひとり
 最初いっしょに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であっ
 た。

あ ととき れい とお うみ あ き ばしょ ぬ す ゆかた き
 或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着よう
 とすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落とすために、後
 ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から
 下へ落ちた。先生は白 緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見
 えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出し
 た。先生は有難うと云って、それを私の手から受け取った。

あと ついで と こ ほうがく およ い
 次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行っ
 た。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に
 浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼
 の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り
 狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上に寝た。私もその
 まねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快
 ですね」と私は大きな声を出した。

うみ なか お あ しせい あらた せんせい かえ
 しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といっ
 て私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし
 先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた
 もと みち はまべ ひ かえ
 元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大分長くここにいるつもりですか」と聞いた。考^{かんが}えのない私はこういう問いに答えるだけの用意^{ようい}を頭^{あたま}の中に蓄^{たくわ}えていなかった。それで「どうだか分^{わか}りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急^{きゅう}に極^{きま}りが悪^{わる}くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始^{はじ}まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解^{わか}った。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑^{にがわら}いをした。私はそれが年長者^{ねんちようしゃ}に対する私の口癖^{くちくせ}だとい^{べんかい}って弁解^{あいだ}した。私はこの間^{せいようじん}の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉^{かまくら}にいない事や、色々^{いろいろ}の話^{はなし}をした末、日本人にさえあまり交際^{すえ}をもたないのに、そういう外国人^{がいこくじん}と近付き^{ちかづ}になったのは不思議^{ふしぎ}だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗^{あん}に相手^{あいて}も私^{おな}と同じような感じ^{かん}を持ってはいはしまいかと疑^{うたが}った。そうして腹^{はら}の中^{なか}で先生^{へんじ}の返事^{へんじ}をよき^{よき}予期^{ちんぎん}してかかった。ところが先生はしばらく沈吟^{ちんぎん}したあとで、「どうも君の顔には見覚え^{みおぼ}がありませんね。人違^{ひとちが}いじゃないですか」といったので私は変^{へん}に一種^{いっしゆ}の失望^{しつぼう}を感じた。

よん 四

私^{わたくし}は月の末^{つき}に東京^{すえ}へ帰^{とうきよう}った。先生^{かえ}の避暑地^{せんせい}を引き上げたのはそれよりずっと前^{まえ}であつた。私は先生^{わか}と別^{わか}れる時^{とき}に、「これから折々^{おりおり}お宅^{たく}へ伺^{うかが}っても宜^よござんすか」と聞^きいた。先生^{たんかん}は単簡^{たんかん}にただ「ええいらっしゃい」といっただけであつた。その時分^{じぶん}の私は先生^{こんい}とよほど懇意^{こんい}になつたつもりでいたので、先生^{すこ}からもう少し濃^{こまや}かな言葉^{ことば}を予期^{よき}して掛^{かか}つたのである。それでこの物足り^{ものた}ない返事^{へんじ}が少し私^{じしん}の自信^{いた}を傷^{いた}めた。

私はこういう事^{こと}でよく先生^{しつぼう}から失望^きさせられた。先生^きはそれに気が付^きいているようでもあり、また全^{まった}く気が付^{けいび}かないようでもあつた。私はまた軽微^くな失望^{かえ}を繰^くり返^{かえ}しながら、それがために先生^{はな}から離^ゆれて行く気^きにはなれなかつた。むしろそれとは反対^{はんたい}で、不安^{ふあん}に揺^{うご}かされるたびに、もつと前^{まえ}へ進^{すす}みたくなつた。もつと前^{まえ}へ進^{すす}めば、私の予期^めするあるもの^{まえ}が、いつか眼^めの前^{まえ}に満足^{まんぞく}に現^{あら}われて来^くるだろ^{おも}うと思^{わか}つた。けれどもすべての人間^{にんげん}に対して、若^{たい}

ち すなお はたら
い血がこう素直に働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持こころもちが起るのか解わからなかつた。それが先生の亡なくなった今日こんにちになって、始めて解わかって来た。先生は始めから私きを嫌きらっていたのではなかつたのである。先生が私しめに示ときどきした時々の素気そっけない挨拶あいさつや冷淡れいたんに見える動作みは、私どうさを遠とおざけようとする不快ふかいの表ひょうげん現げんではなかつたのである。傷いたましい先生は、自分じぶんに近ちかづくようとする人間に、近ちかづくほどの価値かちのないものだから止よせという警告けいこくを与あたえたのである。他ひとの懐なつかしみに応おうじない先生は、他けいべつを軽蔑けいべつする前に、まず自分をを軽蔑してしていたものとみえる。

むろん たず
私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業じゅぎょうの始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経つうちに、鎌倉かまくらにいた時の気分が段々薄きくなって来た。そうしてその上に彩うえられる大都会だいかいの空気が、記憶きおくの復活ふっかつに伴ともなう強い刺戟つよと共に、濃しげきく私の心ともを染め付けた。私は往來こころで学生その顔おうらいを見るたびに新あたらしい学年がくねんに対する希望きぼうと緊張きんちようとを感じた。私はしばらく先生の事わすを忘れた。

じゅぎょう はじ
授業が始まって、一カ月ばかりすると私わたくしの心こころに、また一種の弛いっしゆみができてきた。私は何なんだか不足ふそくな顔かおをして往來おうらいを歩き始めた。物欲あるしそうに自分はじの室ものほの中じぶんを見廻へやした。私の頭みまわには再び先生あの顔ふたたが浮せんせいいて出た。私はまた先生あに会あいたくなつた。

うち たず とき
始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚おぼえている。晴れた空が身に沁み込むように感かんぜられる好いい日和ひよりであつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉かまくらにいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅たいていにいるという事ことを聞いた。むしろ外がいしゆつぎら出で嫌きいだという事も聞いた。二度来て二度とも会にどきえなかつた私は、その言葉ことばを思おもひ出して、理由わけもない不ふまん満まんをどこかに感げんかんじた。私はすぐ玄関先げんかんを去さらなかつた。下女げじよの顔すこを見て少し躊躇ちゆうちよしてそこに立たっていた。この前まえ名刺なめいしを取り次とぎ次ついで記憶きおくのある下女まは、私まを待まちたしておいてまた内うちへはいつた。すると奥おくさんらしい人ひとが代かわりて出でて来た。美うつくしい奥おくさんであつた。

ていねい できき おし
私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先でききを教おしえられた。先生は例月れいげつその日になると雑司ヶ谷ぞうしがやの墓ぼち地ちにある或ある仏ほとけへ花はなを手向たむけに行く習慣しゅうかんなのだそうである。「たつた今いま出たばかりで、十分じゅうぶんになるか、ならないかでございます」と奥きさんは氣きの毒どくそうにいつてくれた。私は会え釈しゃく

して外へ出た。賑かな町の方へ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側からはいって、両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。その言葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応えられなくなった。

「私の後を跟けて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然いえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心したらしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解らなかった。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあった。全権公使何々と

いうのもあった。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしょう」と先生に聞いた。「アン Dre とでも読ませるつもりでしょうね」といって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまい「あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事ありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなった。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行った。先生はいつもより口数を利かなかった。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいっしょに歩いて行った。

「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所もありませんから」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻って来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかった。

ろく
六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であった。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時も静かであった。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであった。私は最初から先生には近づきがたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直感をとにかく頼もしくまた嬉しく思っている。人間を愛し得る人、愛せずにはいけない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であった。

今いった通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があった。窓に黒い鳥影が射すように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であった。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちょっと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞に過ぎなかった。私の心は五分と経たないうち

へいそ だんりょく かいふく くら くも かげ わす
に平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春の尽きるに間のない或る晩の事であった。

せんせい はな わたくし ちゅうい いちよう たいじゅ め まえ おも
先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏の大樹を眼の前に思い
う かんじょう まいげつれい ぼさん ゆ ひ みっかめ
浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参に行く日が、それからちょうど三日目
にあた かがょう ひる お らく む
に当たっていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であった。私は先生に向かってこ
ういった。

ぞうしがや ち
「先生雑司ヶ谷の銀杏はもう散ってしまったでしょうか」

からぼうず
「まだ空坊主にはならないでしょう」

こた かお みまも め はな
先生はそう答えながら私の顔を見守った。そうしてそこからしばし眼を離さなかった。私はす
ぐいった。

こんど はかまい とき とも よ
「今度お墓参りにいらっしゃる時にお伴をしても宜ごさんすか。私は先生といっしょにあすこ
いらがさんぽ
いらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすったらちょうどいいじゃありませんか」

なん ほんとう
先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」とい
って、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとする風に見えた。私と行きたくない口実だか何だ
か、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気にな
った。

「じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴れて行って下さい。私もお墓参りをしますから」

じっさい くべつ むいみ まゆ
実際私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉
がちよっと曇った。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付け
られないかすかな不安らしいものであった。私はたちまち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の
きおく つよ おも おこ ふた ひょうじょう まった おな
記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があって、他といっしょにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行った事がないのです」

なな
七

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かって、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞっとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなった時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でとって、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔なんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいきます。だからなぜそうたびたび来るのかとって聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得要領のものであったが、私はその時底まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経たないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外の人からこういわれたらきっと癩に触ったろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癩に触らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は淋しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくっても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょう。動いて何かに打つかりたいのでしょう……」

「私はちっとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういって淋しい笑い方をした。

はち
八

さいわ せんせい よげん じつげん す けいけん とうじ わたくし うち
幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私 は、この予言の中に
ふく 含まれている明白な意義さえ了 解し得なかった。私は依然として先生に会いに行った。その
うち 内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければ
ならないようになった。

ふつう にんげん おんな たい れいたん とし わか いま けいか
普通の人間として私は女 に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過し
て来た境 遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが
げんいん 原因かどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かって多く 働 くだ
けであった。先生の奥さんにはその前玄関で会った時、美しいという印象を受けた。それ
から会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれと行ってとく
に奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかったのだと解釈する方
が正当かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心 持で奥さんに対
していた。奥さんも自分の夫のおとところ へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらし
い。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始
めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない。

ときわたくし せんせい うち さけ の おく で き そば しゃく
ある時 私 は先生の宅で酒を飲まされた。その時奥さんが出て来て傍で酌 をしてくれた。
先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑み
ほ 干した盃 を差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取っ
た。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇 の先へ持って行っ
た。奥さんと先生の間に下のような会話が始まった。

めず こと
「珍しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」

きら たま の い ころもち
「お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。好い心 持になるよ」

「ちっともならないわ。苦しいぎりです。でもあなたは大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上
がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好い心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜ごさんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋しくなくて好いから」

先生の宅は夫婦と下女だけであった。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は宅の中にあるものは先生と私だけのよな気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考えていた。

「一人貰ってやろうか」と先生がいった。

「貰ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経ったってできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といって高く笑った。

きゅう
九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对であった。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、座敷で私と対坐している時、先生は何かのついでに、下女を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。(奥さんの名は静といた)。先生は「おい静」といつでも襖の方を振り向いた。その呼びかたが私には優

しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であった。ときたまご馳走になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出されるようであった。

先生は時々奥さんを伴れて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あった。私は箱根から貰った絵端書をまだ持っている。日光へ行った時は紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便も貰った。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであった。そのうちにたった一つの例外があった。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくて、どうも言逆いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になっているので、格子の前に立っていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まって来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあった。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ歸つた。

妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は歸つたなりまだ袴を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といっしょに麦酒を飲んだ。先生は元來酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目です」といって先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻の事が引っ懸っていた。肴の骨が咽喉に刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止した方が好かろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤解するのは。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であった。